
❖ 国際シンポジウム ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター国際シンポジウム

日本仏教と論義

Japanese Buddhism and Debate (Rongi)

2018 年 5 月 13 日（日）10：30～16：45

龍谷大学大宮学舎 東翼 302 教室



会場の様子

（龍谷大学大宮学舎 東翼 302 教室）

❖ シンポジウムの概要 ❖

2018 年 1 月 25 日、龍谷大学世界仏教文化研究センターと名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）間で、研究に関する包括協定が結ばれた。今回の国際シンポジウムは、両センターが協定締結後に行う初めての会となる。

日本の仏教は「論義」による教学研鑽によって各宗派の教学体系を整備していった。一方、近現代の仏教研究は、各宗派の教学や各人師の思想・信仰等に、重点が置いてきた。しかし、その大元には、厳然として「論義」があるのであり、本シンポジウムでは、先行

する歴史学的・法会学的観点からの論義研究を尊重しつつも、これに教学的観点からの論義研究を加味し、「論義」が日本仏教の展開に大きく寄与した事実を確認するという目的の下、企画・開催された。

＜基調講演＞ 10:45～11:45

テ ー マ：「宗教思想の原型としての論義」

“Debate as the Archetype of Religious Thought”

講 演 者：ジャン＝ノエル・ロベール（コレージュ・ド・フランス教授）



ジャン＝ノエル・ロベール氏
(コレージュ・ド・フランス教授)

ロベール氏は、日本において主な仏教宗派には「論義」に関する史料が膨大に残っているが、それらは未だ十分に研究されているわけではなく、特に英語やフランス語での研究は稀であるという。また、日本においてもまだまだ宗教的現象としての「論義」に関する総合研究は行われていないと指摘する。欧米では現在、「スコラスチズム」または「スコラ学的方法」という名の下、複数の宗教を越えて、新しい比較研究が行われている。その目的は、それぞれの経典の内容を、定められた規則によって合理的に理解しようというものである。

ロベール氏によると「スコラ学的方法」の発生については、研究者の間で意見が分かれるという。多種多様な宗教聖典を人間が解読する必要性から、場所等に縛られることなくある種普遍的に、そして自発的に発生したものと考える学者（*eg.* José Ignacio Cabezón）もいれば、その成立が一定の時代と場所、即ち初期中世の西北インドと中央アジアで生じたと見なし、そこからユーラシアの東西に広がったと主張する研究者もいる（*eg.* Christopher Beckwith）。

しかしロベール氏は、もし中世の西ヨーロッパで *disputatio*（「デイスプタチオ」＝議論）と呼ばれた討論方法が「スコラ学的方法」として明確な特徴だとするならば、その意義的な研究の範囲はかなり限られることになる」と述べる。なぜなら、一定の「デイスプタチオ」

の伝統を有する文化圏は、三つしかないからである。それらは、中世の西ヨーロッパ、チベットそして日本である。これらを鑑みた場合、ロベール氏は、これからの「スコラ学的方法」に関する研究は、この三つの文化圏における「デイスプタチオ」の歴史に関する正確な研究に基づいて行われなければならないのではないかと主張した。

またロベール氏は最後に、日本の「論義」と一般の仏教思想史の関係を一つの具体的な例として、古宇田亮宣編の『天台宗論義百題自在房』の「文字即解脱」の題の紹介も行った。

<講演> 13:00～13:40

テーマ①：「法相論義と仏道—仏性義の展開と一闡提の会通—」

“Hossō Debate (Rongi) and the Buddhist Path: The Development of the Interpretation of Buddha Nature and Reconciliation of the Idea of Ichchantika (Issendai)”

講演者：楠淳證（龍谷大学文学部教授）



楠淳證氏

（龍谷大学文学部教授、アジア仏教文化研究センター長、
世界仏教文化研究センター基礎研究部門長）

日本仏教は「論義」によって練り上げられた。そしてそれを基として様々な思想が展開し、各宗の仏道理論の構築と実践とがなされていった。日本では、学侶が行ってきた論義研鑽（教学）による理論構築（思想）を基に、種々の実践や諸信仰の展開等（仏道）が生じた。本発表で楠氏は、大乘仏教の中で唯一「五姓各別」を了義真実であると説く点に特色を有する法相宗において、仏道実践の障碍とも言える「種姓」に関しての諸問題を、法相学侶がどのように解決していったのかを「論義」を中心に検討を行った。

楠氏は、唯識学侶は五姓各別を正義説として護持する反面、自らが菩薩種姓であることをさまざまに検証し確認していったと述べる。またこのようなあり方は、昭和年代には全く論じられてこなかったという。しかし平成に入り、論義研究ならびに古写文献の翻刻読解研究が主流となることで、「学侶による五姓各別研鑽のあり方」への解明が大きく進展す

ることになったという。

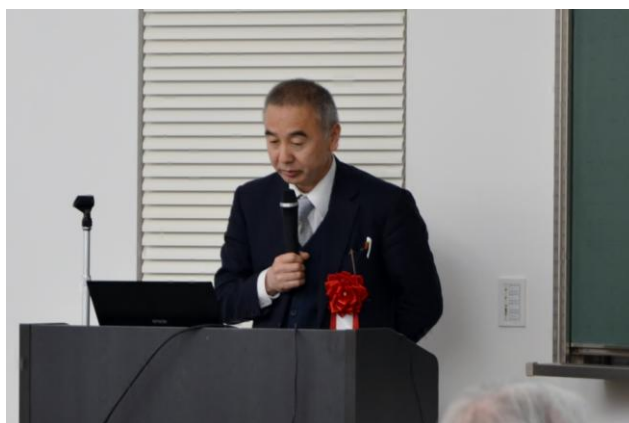
楠氏は、学侶から学侶へと連綿として続く五姓各別護持の諸展開の上に、定姓二乗・不定姓・断善闡提・大悲闡提への不安の払拭が進められ、ついには貞慶における無性闡提への会通となって完結したという。また、貞慶のあり方を見ると、教学（論義）による理論構築（思想）によって信仰（仏道）を展開していることが分かる。そして楠氏は、これは貞慶のみならず他の唯識学侶たちもまた同じであっただろうと述べた。

＜講演＞ 13:45～14:25

テーマ②：『法勝寺御八講問答記』に見る戒律論義

“Debates (Rongi) on the Subject of Monastic Discipline (Kairitsu) in the *Hosshōji mihakkō mondō kī*”

講演者：蓑輪顕量（東京大学大学院人文社会系研究科教授）



蓑輪顕量氏
(東京大学大学院教授)

法勝寺は白川上皇によって創建された御願寺の一つである。白川上皇の死後、天承 2 年に開始された法会が法勝寺御八講であった。この法会は当時の仏教界における最も格式の高い法会であったという。御八講は五日間行われ、南都僧と天台僧との間で「論義」が行われた。この記録が『法勝寺御八講問答記』である。蓑輪氏によると、この「論義」の内容を解明することは、記録が少なくかつては困難であったが、現在は SAT データベース等のおかげで内容を復元することが容易になってきているという。

「両方」（両盈、両様、みな「りょうよう」と読む）と呼ばれる形式の問題は、その質問に肯定的に答えてもまたは否定的に答えても、いずれも矛盾が生じるというものであった。この両様の問題は、問者がこの性質の問題を提出すれば、必ず答える講師の側が不利になる、すなわち問者の優秀性が際立つという問題であった。このような問題が『法勝寺御八

講問答記』には数多く見られるという。この「両様」であるが、伝統的には「両関」と呼ばれたものとの関連を推定させるものである。例えば、蓑輪氏は『大毘婆娑論』の中に見られる「宗に従えば義に違い、義に従えば宗に違う」を挙げ、そこには、構造的な近似性が想定できるとした。

＜講演＞ 14:30～15:10

テーマ③：「論義の歴史と真言宗」

“The History of Debate (*Rongi*) and the Shingon Buddhist Tradition”

講演者：苔米地誠一（元大正大学教授）



苔米地誠一氏
(元大正大学教授)

苔米地氏は、「論義」「談義」「堅義」は全く別のものであるにもかかわらず、現在、混同されている状況があると述べる。氏は、宗を異にする者が同等の立場で同じテーマについて議論し合う（宗論）ものが「論義」と言う。

苔米地氏によると、奈良時代には、問答・論義を行った事実は認められないという。「論義」が行われた最も早い記録は弘仁 4 年（813）正月の宮中御齋会における内論義である。承平 7（937）年の維摩会では「番論義」というものが行われている。これは、二人一組（番＝つがい）の問答僧が、問者と答者に別れて問答を行い、一組の問答を一番として、数組数番の問答を行うものである。苔米地氏は、奈良時代から摂関期においては「論義」は、天皇・上皇・勅使・藤氏長者・幕府将軍など、政治的権力者の前で、その娯楽のために行われた面も強かったが、それらは諸宗の僧が互いに宗義を戦わす「宗論」である所に特徴があると述べた。真言宗における論義としては、院政期の教学復興に合わせて、仁和寺や醍醐寺において鎮守講論義が創始されている。これらは寺家内部における同宗の僧による「論義」である。

また苦米地氏は「論義」には人の娯楽として催された宗論と、寺家内の鎮守法楽・祖師法楽のための「論義」という 2 種の法会・儀礼としての「論義」があり、共に「楽しみのため」という共通点があったと述べた。

<パネルディスカッション> 15:40～16:40

コーディネーター：阿部泰郎（名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター長）



パネルディスカッションの様子

コーディネーターに、阿部泰郎氏（名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター長）を迎え、パネルディスカッションが行われた。まず阿部氏によって、4 名の講演に関する総括がなされた。阿部氏は、ロベール氏の発表からは、「論義」の研究のさらなる展開のための「スコラ学的方法」の再認識の必要性を感じさせられたこと、楠氏の発表からは、法相論義で何が問われ何が求められていたかを明確に理解できたこと、蓑輪氏の発表からは、「両方」が現在の日本においても生きていることを想起させられたこと、苦米地氏の発表からは、「論義」の歴史を概観することを通じて「法楽」についても考えさせられたこと等を感じとして述べた。

その後、ディスカッションでは、ロベール氏は、未だ「論義」の伝統が生きている日本、そしてチベットの比較研究をしてみてもどうかと述べた。楠氏は、「論義」は、おそらく各宗でも様々な形で残っているのではないかとということ、本願寺派の安居のあり方と比較しながら述べた。蓑輪氏は、言語を超えた世界をどのように言語で表現するか、その難しさについて語った。その際、日本の和歌は大きなヒントになるのではないかと述べられた。苦米地氏は、まだまだ初期の「論義」「談論」「堅義」については、具体的に分からない点が多く課題も多いことが述べられた。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔